

よぬだ ところどころ



第三十六号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

西脇光徳寺境内の薬師如来

薬師如来を祀る寺や堂をいう。薬師本願功德経では、薬師如来は東方淨瑠璃世界（瑠璃光淨土とも称される）の教主で、菩薩の時にこの大願を發し、この世における衆生の疾病を治癒して寿命を延べ、災禍を消去し、衣食などを満足せしめ、かつ仏行を行じては無上菩提の妙果を証らしめんと誓い仏と成ったと説かれる。瑠璃光を以て衆生の病苦を救うとされている。無明の病を直す法薬を与える医薬の仏として現世利益信仰の対象となる。写真は薬師寺

写真は現在の光徳寺境内にある市指定文化財の薬師如来を安置する堂である。この堂と像は移転したものであり、もとは安養寺にあったとされる。

注 天神社の南にある稲荷塚古墳安養寺鐘楼跡という住宅地図によれば、天神神社の北に区画の特徴的な場所がある。その前を水路が天神神社を巡るようにしてある。東は水田で、一段低くなっている。佐合氏の米田物語によればこれが安養寺の跡ということになる。



この地に関係する天神・修験道・薬師堂に共通するもの、及びその場所はどこかということとが重要である。すなわち、西脇東部の水田地帯は村落の維持に極めて重要な生産機能であり、これを保全し収穫を安定化させるために神仏の力を借りることは村落の維持に欠かせなかったと思われるからである。西脇地区の東の水田地帯は飛驒川が形成した河岸段丘で構成されており、比高の高い東栃井や為岡・山本からの水が滞りなく供給され、高低差に従って合理的に制御し流すことが必要であった。また、水不足の折は用水分水を巡って村民相互で争いもおこったため、西脇の区長は天神神社に籠もって水を見張ったという話もある。

いずれにせよ、科学技術未発達時代は自然に対して折り供物を供えて、効力のあるもの（神仏その他）を総動員して対処したと考えるのは不思議ではないと思われる。明治時期以降、急速に近代化し農業用水の供給が不安でなくなると、神仏に頼る必要性がなくなり、必然的に信仰や行事は衰退形式化し、祭祀施設も不必要となり集約され・廃棄される。今神社なども同じで、本来そこにあった意味が失われているのが現状である。